

『松末智先生、寂しくなりましたが、 適正な臨床栄養の普及のためにがんばります！』

8月はずっと暑い、熱いでした。7月30日に日本最高気温が更新されたのですが(41.2℃)、8月5日には群馬県伊勢崎で**41.8℃**という新記録が出ました。8月30日、31日にも40℃を越えた地点がありました。とにかく暑い、熱い。熱帯夜がずっと続いています。日中に外へ出る時は、私も日傘を差していますが、太陽からの熱を日傘で遮っても、地面からの熱風を遮ることはできません。ムワっとする熱風です。要するに、外出するな！なのでしょう。そんな暑い中、今年も夏の高校野球甲子園大会が開催されました。よく倒れずに野球をやっているな、と感心しています。昨年は古希記念に開会式を見に行きましたが、今年はそんな気になれませんでした。優勝は沖縄尚学高校。有力校が次々と負けていきました。たくさんのドラマがありました。すばらしい！おめでとうございます。沖縄は大盛り上がりでした。しかし、広島県代表の広陵高校が1回戦は勝ったのに2回戦は出場辞退という問題があり、部内での暴力事件が話題となりました。詳細は不明ですが、悪しき伝統が残っている、そんな問題だそうです。悪しき伝統は断ち切らなくてはならない、当然です。

今年の8月は戦後80年。原爆投下からも80年。**平和が大事、戦争はしてはいけない**。そんな議論が盛り上がりました。しかし、世界中で戦争はなくなりません。ロシアのプーチンとアメリカのトランプが会談しましたが、何の解決にもなっていません。ウクライナがかわいそう。イスラエルのガザ地区侵攻によって、餓死するパレスチナの子供達の悲惨さが大変な問題になっています。人道的な大問題です。この飽食の時代に餓死する子供がいる、それ自体が問題です。早く解決して欲しいと願うしかなのですが、世界各国が軍備に力を入れています。世界戦争が起こるのではないか、という雰囲気です。軍備に使うお金を、みんなが平和に生きていけることに使いましょや。トランプがノーベル平和賞を欲しがっているとのこと。馬鹿な話です。ノーベル賞の価値が下がります。

8月は非常に悲しいニュースがありました。尊敬する先輩、岡田正門下の兄弟子、**松末智先生**がお亡くなりになりました。驚きました。松末先生は「医療におけるチームとは：多職種医療チーム論」を書籍として出版する準備をしておられました。私は「巻頭言」を書くよう依頼され、完成させて送ったのが7月16日。届いたとの電話を翌17日にいただき、いろいろ話をしました。病気療養中であつたことは4月に姪の美樹さんから教えていただいていたので、大事にしてくださいと言ったのです。それが最後の会話になりました。その後1か月も経たない8月9日に亡くなられたとのこと。え？亡くなられた？嘘でしょう？信じられない。半年前の2月にはJSPENが開催された横浜で、リーダーズの仲間達と一緒に中華料理を食べました。松末先生がご病気だとは誰も気づきませんでした。同じように中華料理を食べておられました。本当に残念です。われわれリーダーズの面々を見守って、リードしてくだ

➡左がネットが張られてからの写真、右がネットがない時の写真。ちょっと違いますよね。私が千里金蘭大学で勤務するようになって、何がいか？という、景色がいいんです、と講演で言っていたのですが、**ちょっと自慢のレベルが下がる**？仕方ありません。単なる教官です、大学の方針には従わなくては、です。ハハハハハ。しかし、ちょっと残念。



↑リーダーズのリーダー。松末智先生がお亡くなりになりました。外科医として、臨床栄養の専門家として、人として、尊敬する先輩です。ご指導ありがとうございました。先生の指導内容はいつまでも。



↑部屋の前のベランダに鳩が来るので、鳩除けネットが設置されました。8階での工事。すごいな、こんな高い所で怖くない？と聞いたら、最初は怖かったけど慣れました、と言っていました。でも、命綱をつけての工事です。当然ですが。私には無理、絶対無理。足腰が震えて何もできませんから。



↑総務の方にネットはいらないんじゃない？景色が悪くなると言ったら、山側はもうネットを張っていますが、どなたもダメとは言っていないよ、でした。まあ、そうなんですけどね。でも、写真を撮ってみると、ネットにフォーカスが合うんです。



さった「**リーダーズのリーダー**」でしたので、ご冥福をお祈りします。機関誌に追悼文を書きました。「私は、松末先生に褒められたくて、がんばってきた部分もある。『**がんばってるやん**』と**言われたくて**、いろいろ活動してきた。その『**がんばってるやん**』をもう聞けなくなる、本当につらい寂しいが・・・。」

8月2日と3日、摂津市にあるニプロ株式会社本社ビルで「**第7回 Medical Nutritionist セミナー**」を開催しました。約120名の参加者で、2日間、きっちり勉強していただきました。ハンズオンセミナーではIPエコーを使った静脈穿刺とPICC挿入の実技を熱心に実施しておられました。非常に楽しそうに。昨年、突然のコロナ感染で来ていただけなかった筑波大学の増本先生に「小児の栄養管理」と「小児短腸症候群：基礎と最近の治療」を講義していただきました。格調高い講義で、小児短腸症候群については、機関誌に総説としての投稿を依頼しています。市立芦屋病院の野呂先生には「外科医として考える高齢者に対する栄養管理」、杉田玄白記念公立小浜病院の林先生には「がん患者の栄養管理」の講義をしていただきました。二人とも気合の入った、いい講義をしてくれました。あとは、いつもの講師による講義でしたが、みなさん、新しいネタを組み入れて、いい講義をしてくれました。もちろん、私も・・・だと思っていますが。

8月9日は千里金蘭大学オープンキャンパスとM1(マロワン)グランプリのレシピコンテストが行われました。私はオーキャン会場とM1グランプリの部屋を行ったり来たり。M1グランプリは、吹田市に本社のある「マロニー株式会社」からの依頼を受けて、千里金蘭大学が主催するレシピコンテスト。マロニーというと鍋料理というイメージがあるので、**マロニーを鍋から出そう**、との目的でのレシピ募集です。127チームの応募があり、その中から選ばれた16チームが実際に調理をして審査されました。社長の井上寿夫氏ももちろん審査しておられましたが、さて、社長さんはどれを選んだのでしょうか。結果は、11月の百花繚蘭祭で発表されます。賞品はかなり豪華だそうです。オーキャンにもたくさんの高校生が参加。夏休み中ですから。かなり盛り上がったようです。私も「管理栄養士になったら病院で働きたい？」などの質問をしながら生徒さんを「おもてなし」しました。でも、病院管理栄養士に興味があるという高校生は少ない、まだそこまで考えていない、でした。

8月24日は、もう入学試験。AO入試の面接官となり、6人の受験生の面接をしました。2対1なので、受験生の緊張感はすごかったと思います。梅本先生がきちんとした質問をされました。私は雰囲気や和らげる役目。6人とも質問にリッパに答えていました。

8月26日と27日には愛媛に帰省。お墓参り・お墓掃除をしてきました。新米が出ていたので買いましたが、昨年の2倍の高値になっているとのこと。米離れが始まりそう。**お米が高すぎます**

➡完成品を並べました。いろいろ工夫されていて、感心しました。私は全部食べました。どれが一番？わかりません。審査員になるようにこの話もあったのですが、私には評価は無理ですとお断りました。結局、社長さんが選ばばいいんじゃない？と思ったのですけどね。



↑ マロワンレシピコンテスト。左上はマロニー株式会社の井上寿夫社長です。参加者の学生さん達の写真を出します。みなさん、顔をぼかしています。結構時間がかかりました。でも、こんな時代です。これを見たら、学生さん達、自分だとわかりますよね。自分だとわかれば、それだけでいいですよ。午前中の分はYouTubeで見ることができます。「吹田市、YouTube、千里金蘭大学」で検索すると動画を見ることができます。



↑ 自分達の自慢のレシピの解説中。いろいろ工夫したレシピですし、レシピの名称、チームの名称も工夫しています。



↑ このマロワングランプリの話を聞いた梅本先生は、ぼかし無しで出てもらいました。大活躍でした。ご苦労様でした。しかし、学生達、講義の時はぼーっとしているのに、調理場では没頭して、へええ。てきぱきやっているなあと感じました。そうですね、講義はつまらないからね。



ゼン先生：先生、8月も暑い、熱い、です。この1か月間、暑い、熱いと言いながら過ごしました。

小越先生：本当に暑かったなあ。

ゼン先生：先生、「暑かった」という過去形ではありません。9月も暑いし、10月もこの暑さが続くとの予想です。

小越先生：9月も10月も？予想だろう？「よそう」を反対から読むと「うそよ」だから、予想がはずれるのを期待しよう。

ゼン先生：そんなのききなことを言っている場合じゃないと思いますが。この暑さのためにどれだけの影響が出ているか。本当に大変です。

小越先生：しかし、どうしようもないじゃないか。お天道様に聞いてくれ、だよ。

ゼン先生：その通りです。要するに、地球温暖化で、世界中が影響を受けているんです。

小越先生：本当にそうだ。地球全体がおかしくなっている。

ゼン先生：私は8月生まれなので、夏には強いと思っているのですが、今年の夏の暑さはこたえます。食欲は落ちませんが。

小越先生：暑いのに、食欲は落ちないのか？

ゼン先生：落ちません。それどころか、逆に、食欲が亢進しているかもしれません。

小越先生：逆に困ったことなんじゃないか？

ゼン先生：そうですね。体重管理に苦労しています。

小越先生：この暑さだったら、ふつうは食欲も落ちるはずだが。

ゼン先生：そうでしょう？

小越先生：特に高齢者にはつらい季節だよ。熱中症で倒れる人も多いだろう？

ゼン先生：若い人でも熱中症になっています。

小越先生：へええ。若い人は元気なはずじゃないか。若い人も虚弱化しているのか。

ゼン先生：そうかもしれません。高齢者ではフレイルが目立っていますが。

小越先生：フレイルか。それにこの暑さが加わると、大変だな。

ゼン先生：本当にそうです。私も身体を鍛えなくては！

小越先生：ははは、古希を過ぎたのに元気だな。

ゼン先生：「元気ががんばらないといけない」と自分を鼓舞しています。

小越先生：どうしたんだ？年寄りの冷や水か？

ゼン先生：8月9日に、松末智先生が亡くなられたんです。松末先生の遺志は「がんばれ」のはずなので、がんばらないといけない、と思っているんです。

小越先生：あの松末さんが亡くなった？おいくつだったんだ？

ゼン先生：78歳だそうです。

小越先生：元気だったじゃないか。2月に横浜で一緒に中華料理を食べたんだろう？

ゼン先生：そうなんです。病気だという雰囲気は全くありませんでした。一緒に食事をしたリーダーズの仲間達も、誰も気づ



↑ 100周年には素敵なポスターもできていました。栄養学部だけでなく、大学としてももっと盛り上げて欲しかったような気がしましたが、調理室が狭いので無理かも。しかし、百花楼開校では大々的に盛り上げて欲しいと思います。



↑ オーキャンではいつものように食堂の横のフロアでいろいろ栄養学部のおもてなしをしています。クリニコのエンジョイゼリーなどの試飲試食もしてもらっていますし、いろいろ、いろいろ、栄養学部の内容についてお知らせしています。心からの「おもてなし」をしています。下の写真は模擬授業をしている中村先生です。内容は知らないのですが、ばってらを試食していたようです。入試の面接官をして、オーキャンに参加した生徒さんの話を聞いてみると、受験生の模擬授業の評判は非常にいいのです。今回一緒に面接官をもらった梅本先生の模擬授業を体験して、当大学に来たいと思ったと言った生徒がいました。私にはこういう模擬授業はできません。手術の動画でも見せてあげようかな。そうすると、来たくないという生徒が増えるかもしれませんけど。

いていなかったと思います。だから、驚きでした。

小越先生：そうだろう？

ゼン先生：松末先生が闘病中だという話は4月に聞いてはいたんですが、8月に亡くなるなんて、信じられないことでした。

小越先生：そうか。それは残念なことだな。

ゼン先生：本当に、残念です。なんか、私自身、信頼して相談できる人がいなくなった、そんな感じなんです。

小越先生：君にとっては特別な存在だったんだな。

ゼン先生：そうです。特別でした。本当に特別でした。私の活動を理解して、応援してくださっていました。もちろん、私自身が松末先生の考え方や生き方を尊敬していたので、そこに向かってやっていたのですけど。

小越先生：本当に尊敬できる先輩だったんだな。

ゼン先生：そうです。困ったり悩んだりした時は相談していました。正しい考え方でしょうか、という感じで。

小越先生：日本の NST の先駆者 だったよな。

ゼン先生：そうです。先に NST 活動を始めたのは大阪大学の岡田先生です。1974 年からです。でも、IVH 研究室としての活動だったので、医師と薬剤師が中心でした。看護師はチームとしては加わっていませんでした。

小越先生：管理栄養士は？

ゼン先生：その頃はまだ管理栄養士制度は始まっていませんでしたよ。

小越先生：そうだったな。管理栄養士が NST に加わることになったのは比較的最近だな。

ゼン先生：そうですね。松末先生は、天理よろづ相談所病院で、看護師・薬剤師・栄養士・検査技師と一緒に、静脈栄養の適正な運用のためには必要だとして NST 活動を開始したんですから、NST らしい活動は、松末先生のほうが先ですね。

小越先生：そういうことになるか。その頃の松末さんは 30 歳代だろう？

ゼン先生：米国栄養輸液調査団（松末先生がそう言っている）としてアメリカへ行ったのは 1977 年で、帰国してからなので、30 歳になったばかりだったはずですよ。

小越先生：天理よろづ相談所病院が、よくそんな若い外科医の意見を取り入れて NST 活動を開始させたな。

ゼン先生：本当にそうですね。先輩もたくさんいるのに。

小越先生：そう思うだろう？ まあ、それだけ信頼される外科医として仕事をしていたんだらう。

ゼン先生：天理よろづ相談所病院の外科には前谷俊三先生がおられました。1969 年に TPN を実施したことを報告しておられます。日本で最初に TPN を実施したのは東北大学の小野寺時夫先生で、私の調べた範囲では、次が岡山大学の白髭健朗先生、その次が前谷先生なんです。

小越先生：そんなに早く、天理では TPN が行われていたんだ。

ゼン先生：そうです。松末先生は京都大学卒業後、天理に赴任して、TPN という栄養管理方法があることに感動したと言っておられました。食べられない患者に栄養を投与できる！です。

小越先生：講演でその話をしていたな。卒業してすぐの京都大学病院で、術後合併症で食べられなくて亡くなった患者に対して、どうしようもないのかと思った。その頃の京大では食べられなくなった患者に栄養を投与する手段がなかった。ところが天理に来てみると TPN が実施されていた。すごい。大学より進んでいる、そう思ったということだったな。



↑ フジメディカル出版の宮定さんが「第7回 Medical Nutritionist セミナー」の会場で書籍販売をしてくれたのですが、あまり売れなかったそうです。またまた、売れない本を出版してしまった。カテーテル関連血流感染症の勉強のために310ページの本なんて、読まないでしょうね。売れないな。自虐ではありません。



↑ 第7回 Medical Nutritionist セミナーの講師陣です。みなさん、気合がはいっていますし、にこやかに講義しています。本当、楽しそうに講義していますよね。吉川くんはネクタイ着用しています。野呂くんは表情が硬いのですが、真面目なんですよ。私の服装が一番ラフです。増本先生の楽しそうな雰囲気がいいですね。西口先生は、これは、たぶん、質問に答えている時です。



↑ ニプロの製品展示です。静脈栄養・経腸栄養の器材のほとんどを販売しています。もちろん、IP エコーも PICC も CV ポートもです。経鼻カテーテルやその固定にも力を入れているようです。PICC の固定器具も販売開始しましたが、売れるか売れないかは価格にかかっています。縫合すればタダなんですから。

ゼン先生：そうです。その感動のまま、必死で TPN の勉強をした、と言っておられました。

小越先生：そうか。なるほど。その前谷先生がおられたから、松末さんの意見の後押しをしたんだらう。

ゼン先生：そうでしょう。松末先生は TPN を積極的に実施するように活動したのですが、カテーテル感染の発生率が高かった

んです。それをなんとかしなければ、と思っていた時に米国栄養輸液調査団としてアメリカに行って、チームとして活動することで、適正な TPN を実施することができる、感染も予防できる、その効果を目の当たりにしたとのことです。

小越先生：そこで NST 活動が必要だという考えになって、活動を開始したんだな。

ゼン先生：そうですね。**NST 活動の原点**ですよね、これが。

小越先生：NST 活動の原点か。現在の全国の NST の連中知ってもらわないといけな。原点回帰だ。

ゼン先生：本当にそう思います。その方法として、IVH ナースという制度を取り入れたり、TPN 輸液の約束処方を決めたりしたとのことです。

小越先生：TPN 輸液の約束処方か。その頃は TPN キット製剤なんてなかったからな。

ゼン先生：最初の高カロリー輸液基本液のパレメンタルが発売されたのは 1979 年でした。それまでは 50% グルコース液にアミノ酸液と電解質を加えて調製していたんですね。

小越先生：そうだ。手間がかかる、輸液が汚染するリスクがある、たくさん問題があった。

ゼン先生：輸液の汚染を予防するためにクリーンベンチで輸液の無菌調製をやったんだそうです。

小越先生：1970 年代にクリーンベンチを使っていたのか。

ゼン先生：ということです。松末先生の論文「天理よろづ相談所病院における臨床栄養の歩みと世界の潮流」に「当時医療用のクリーンベンチは日本になかったので株式会社富士電機が自社の IC 組み立て作業台として製造していたものを流用した。薬剤部でのクリーンベンチ内での TPN 調製は我が国では当院が最初であった。」と書かれています。

小越先生：すごいなあ。大学病院ではなくて、いわゆる一般病院でそれを実施したんだからなあ。

ゼン先生：確か、当時の天理の院長先生が富士電機に依頼して導入したんだそうです。

小越先生：病院としてだったんだな。

ゼン先生：1984 年の病院増築時には、薬剤部に TPN 専用調製室が儲けられて、専任薬剤師による輸液調製が始まったんだそうです。

小越先生：へええ。オレもそれは知らなかった。

ゼン先生：本当にすごいことですよね。IVH ナース制度も、松末先生のアイデアで、病院として一人のナースを IVH 管理の専属としたんですから。

小越先生：今、その IVH ナースが必要なんだよ。輸液のことも管理のことも、そして感染対策もわかっているナースだ。

ゼン先生：そうですね。今は IVH ナースという呼び方はできませんけど。

小越先生：PN ナースか？

ゼン先生：そうですね。とにかく、松末先生の静脈栄養に対する



↑今回は質問が少ないよ、と何度も言いました。井上善文の講義の雰囲気は怖い？質問に対する答え方が怖い？そんな指摘もありましたけど。本当にそうだったらすみません。声も低いし、今回の眼鏡フレームは不人気なので。顔光レンズなので、レンズが濃くなると、柄が悪いじいさんに見えるそうです。すみません。



↑上は会場の雰囲気です。下は1日目のランチョンセミナーです。



↑講義中の雰囲気です。みなさん熱心に勉強しておられます。寝ている人は、たぶん、いません。



↑左の写真は、たぶん、NPE/N 比を計算してくださいと言った時のものです。計算中！です。

思い入れは相当なものだったんです。それだけの実績も残しておられますので、自負もあったと思います。

小越先生：そうだ。だから、臨床栄養の領域の状況に強い憤りを感じていたんだろう。

ゼン先生：その後、松末先生のおかげで TPN を安全に実施でき

るようになると、院内で TPN 症例がものすごく多くなったそうです。なんでもかんでも TPN という風潮が蔓延し
そうになったので、合併症が増加するのではないかと考えた。その結果、思いついたのが PPN なんだそうです。

小越先生：PPN か。PPN は松末さんが考案したのか？

ゼン先生：考案したかどうかは定かではありませんが、PPN という名称を日本で最初に使ったのは松末先生です。

小越先生：へええ、そうなのか。

ゼン先生：最初は peripheral IVH と呼んでいたそうです。

小越先生：それはいまいちだな。

ゼン先生：松末先生もそう思われたそうです。そのころ、PN (parenteral nutrition) という用語が使われていたので、これに peripheral をつけて PPN にしたらいいと思われたらしいんです。

小越先生：世界で最初に PPN という用語を使ったのか？

ゼン先生：1978 年に Freeman JB が PPN という用語を使っていますが、広まっていなかったようです。

小越先生：そうか。まあ、いいだろう。

ゼン先生：その PPN という用語を思いついたきっかけですが、当時「Peter, Paul & Mary」というグループが「パフ」という歌を歌っていて、非常に有名だったんです。ピーター・ポール&マリー：PPM です。

小越先生：なるほど。**PPM** はオレも知っているよ。そこで **PPN** を思いついたんだな。

ゼン先生：ということです。

小越先生：松末さんらしい発想だ。

ゼン先生：末梢高カロリー輸液や中カロリー輸液という呼称を使っていた人もいました。

小越先生：いたな、確かに。

ゼン先生：その呼称は定義が明確ではないから止めようとガイドライン作成時に明記しました。

小越先生：今は使っている人はいないよな。

ゼン先生：いませんね。

小越先生：静脈経腸栄養ガイドライン第 3 版の効果だな。

ゼン先生：そうですね。松末先生は、症例によっては、TPN でなく、PPN で適正な静脈栄養が実施できる、そういう考え方をすればいい。TPN に伴う感染も防げる、と考えたんでしょう。

小越先生：それは本来の PPN の目的だな。TPN と PPN の関係を、きちんと歴史的に理解して開発されたということだな。

ゼン先生：本当の静脈栄養の適応、実施方法、合併症を考えてのことなので、すごいことです。でも、今は、その **PPN は感染しないという考え方だけではダメ**になっています。

小越先生：PPN では感染が起らないという考え方ではダメだと言いたいんだな。

ゼン先生：その通りです。この話は前回にやりました。

小越先生：とにかく、さっきも言っていたけど、松末さんの静



↑ IP エコーを使って、シミュレータでの血管穿刺のハンズオン。穿刺はできるのにガイドワイヤが進まないことが多くて、時間がかかりましたが、シミュレータが悪いんです。でも、全員、血管穿刺に成功していました。



↑ IP エコーを使ったハンズオンセミナーです。シミュレータで指導・練習中です。杉本先生は息子さんに指導しています。下の写真では自分の静脈を IP エコーで観察しておられます。真剣！

脈栄養に対する思い入れは相当なものだったんだ。

ゼン先生：相当だったんだと思います。よく個人的に食事に誘ってもらったんですが、あの温厚そうに見える松末先生の発言の根底には憤りが潜んでいると実感していました。

小越先生：温厚そうに見えるけど、な。オレもそう思っていたよ。しかし、素敵な温厚な紳士だよ。

ゼン先生：そうでしょう？でも、本当は激しい情熱を表に出さないようにしていたんだと思います。

小越先生：人間として、できた人だったんだ。

ゼン先生：私もそうなりたいと思っています。

小越先生：君は無理だよ。古希を過ぎているのにこの雰囲気なんだから。

ゼン先生：やっぱり無理でしょうか。

小越先生：無理だよ。君は君のスタイルでやればいい。松末先生のような人格者になるのは無理だよ。

ゼン先生：わかりました。話を続けますが、もう 15 年前のこと

ですが、医歯薬出版の臨床栄養別冊で「ワンステップアップ 静脈栄養」を出版しました。私が責任編集だったんです。松末先生に「適正な静脈栄養法普及に対する提言！」として「静脈栄養の凋落とその対策—提言に代えて」という原稿を書いていただきました。

小越先生：へええ、15年も前に「静脈栄養の凋落」と言っていたのか。今から考えるとその通りだけど。

ゼン先生：当時の状況から、私が「叱咤激励する原稿を書いてください」とお願いしたんです。

小越先生：そうだな。その頃、既にそういう困った状況になっていたな。

ゼン先生：1970年代から TPN の適応、管理、そして HPN にも真剣に取り組まれていたので、その状況には相当、腹立たしいものを感じておられたのだと思います。

小越先生：その通りだな。その論文を読み返したいと思っているのだが、どういう提言をしてくれているんだ？

ゼン先生：「栄養管理の両輪の一つである PN の急速な凋落には種々の要因があるが、現状のままでは栄養管理そのものがいびつになり、患者への多大な不利益につながるであろう。これが顕著になると、折角多方面の努力で勝ち取った栄養管理の社会的評価も失いかねない危険性を秘めている。医療界はこれを阻止すべく、努力していく必要がある。」です。

小越先生：なるほど。重い発言だ。

ゼン先生：「栄養管理がいびつになる」って、もう、なっていますよね。

小越先生：なっているよ。静脈栄養がこれだけ疎かになっているんだから。経口栄養、経腸栄養、静脈栄養、これをすべて駆使して栄養管理を実施するのが本来の姿なんだ。

ゼン先生：確かに。その結果、患者への多大な不利益につながる、もうそうになっていますね。

小越先生：静脈栄養の意味すらわからなくなっているんじゃないか？糖電解質輸液を投与するだけで静脈栄養だと思っている医師が多くなっているんじゃないか？

ゼン先生：そうです。絶食症例、少ししか食べられない症例に対して、長期間、糖電解質輸液しか投与しない医師が多いんですから。

小越先生：君のアンケート調査でそういう結果が出ていたな。論文にしたんだろう？

ゼン先生：もちろんです。そういえば、この間、病院に勤めている、千里金蘭大学の卒業生と話をしていたら、卒後2年目、結構がんばっている管理栄養士なんですけど、カロリーゼロの輸液をする研修医が多いんですよね、なんて言っていました。

小越先生：ははは、卒後2年目の管理栄養士にそんなことを言われるのか。困ったことだな。医師としてのプライドはどこに



↑懇親会の写真です。料理はかなり多くて、みなさん、満腹になったようです。もっと多くの方に参加して欲しかったのですが、食べ終わった後、一人ひとりに挨拶していただきました。みなさん、栄養管理に対する情熱を語ってくれました。この輪をもっと大きくしたいのですが、なかなか、むずかしい。世の中全体が静脈栄養、経腸栄養に対する興味を失ってきているからだと思います。そうそう、名古屋の杉本先生は親子で参加してくれていました。



↑私にとって特別な先輩、兄弟子の松末先生です。ある意味、人生の師匠でした。上の3人の写真は松山で。右端の城谷先生は松末先生の高校の後輩です。2段目の真ん中の写真は奈良での研究会の時のもので、福原さんは松末先生の一番弟子の一人ですね。その下の写真は、左は恐山での写真。その右は27年後に、高木、松末、根津、井上の4人が集まっのての写真。27年間の差が顕著です。右下は大阪大学 IVH 研究室の忘年会の写真です。松末先生も岡田正門下なので、IVH 研のメンバーなのです。いろんな所、場面での写真があるのです。思い出はつきません。

行っただ？自分で勉強しなくては。

ゼン先生：要するに、医師に対しても教育がダメなんですね。

小越先生：そういうことだが。その卒後 2 年目の管理栄養士、がんばっているじゃないか。

ゼン先生：1 年間、私の臨床医学で講義を受講したからですよ。

小越先生：臨床医学だろう？栄養管理の話はふつうはしないだろう。

ゼン先生：すみません。栄養管理に関連ある医学の講義にしているの、静脈栄養・経腸栄養についても話しています。

小越先生：なるほど、と言いたいが、卒業してからがんばったんじゃないか？

ゼン先生：そうかもしれませんけど。一応、講義で静脈栄養・経腸栄養は大事だ、臨床の現場ではこれができないとダメだ、とは話しています。

小越先生：潜在的にそういう認識があったんだろう、そういうことにしよう。

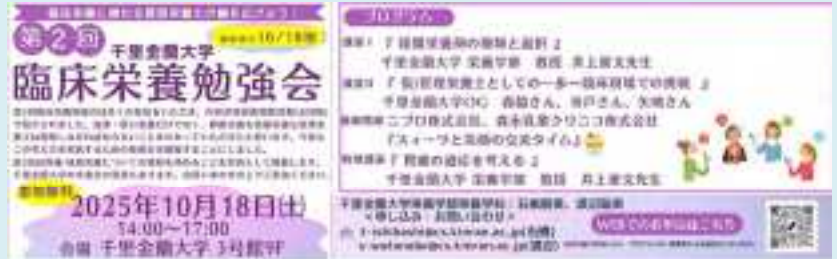
ゼン先生：ありがとうございます。潜在的でもいいです。そういう意味で、私の講義は無駄ではないかもしれない、ということですね。

小越先生：そういうことにしよう。

ゼン先生：ちょっと話は脱線しましたが、とにかく、松末先生の臨床栄養の領域に対する熱い思いを後進に伝えなくてはならない、静脈栄養を疎かにしてはいけない、臨床栄養の発展という歴史をもう一度考えて本当の意義を理解して欲しい、それを今回は言いたかったんです。

小越先生：その通りだよ。あれだけがんばって、君たち「リーダーズ」のリーダーとして活動してくれていたんだからな。その熱い思いをちゃんと伝えなさいよ。

ゼン先生：そうします。でも、本当、寂しいんです。10 月 4 日



↑ 第 2 回千里金蘭大学臨床栄養勉強会を 10 月 18 日に大学で開催します。今回も参加費は無料です。今回のテーマは、胃瘻—経腸栄養について、としました。「タダ」なので、是非、来てください。もちろん、私も「タダ」で講演します。



↑ 帰省して、住んでいた家まで行って、パノラマ撮影しました。家までの石段がかなりきつい。息切れしました。やっぱりいいなあ。ふるさととは。



↑ ふるさとの波止場の写真です。穏やかな海でした。漁船がたくさん、です。

と 5 日に開催する第 18 回リーダーズ学術集会の芦屋市民会館に、ひょっこり来られるんじゃないかと思ったりしています。

【今回のまとめ】

1. 8 月も酷暑でした。これが 9 月、10 月も続くそうです。夏が長い。沖縄に避暑に行きたい！
2. 第 7 回 Medical Nutritionist セミナーは約 120 名の参加者でした。いい勉強をされたのではないかと思います。来年も来てください。
3. 8 月 9 日に、われわれリーダーズのリーダー、松末智先生が亡くなりました。突然のことで、驚きました。私にとっては特別な存在でしたので、寂しい、つらい、悲しい、です。
4. 松末先生は、天理よろず相談所病院で NST 活動を日本で最初に始められ、IVH ナース、クリーンベンチを用いた輸液の無菌調製など、日本の臨床栄養の領域をリードしてこられました。
5. TPN の問題点を考えて PPN を考案したのも松末先生です。
6. 現在の静脈栄養の状況を嘆いておられました。栄養管理そのものがいびつになり、患者への多大な不利益につながる、と。
7. 松末先生の御遺志を引き継いでがんばらなくてはなりません。合掌。